長崎いのちの電話　相談員養成講座　　2023年6月24日

死ぬこと　生きること

内村公義

1.　諫早市少年センターで年に数回、主として不登校の子どもを抱える保護者から相談を受けている。20年近く続けているのだが、相談室に入る前に少し不安な気持ちになることがないわけではない。相談に来る人々は具体的な答えを求めているのだが、私はそんな求めに応じることができるような答えを持っていないからである。できることは、ただ悩みを聴くことだけであり、「こんなことに困っています。どうすればいいんでしょうか」、「どうすればいいんでしょうね」、ああでもない、こうでもない、と一緒に考えているうちに、求めていた答えではないが、何かちょっとした光が見えて、元気になって帰って行かれることが多い。

「いのちの電話」のボランティア相談員の場合にも似たところがある。コーラーから答えを求められて、立ち往生する。そんな時に何か具体的な答えを出すためのヒントがほしい。その願いを叶えてくれるようなテーマが養成講座のプログラムには並んでいる。そんな中で、コーラーと一緒に立ち往生し、共に途方に暮れるしかない、答えのテーマが一つある。それが今回の「死ぬこと　生きること」である。このテーマを与えられて、もう何年になるだろうか。毎年、何を話そうかと迷いに迷っている。人は死ぬのになぜ生きるのか。死ぬとはどういうことか。生きるとはどういうことか。そんな問いに答えられる人はどこにもいない。「未だ生を知らず、いずくんぞ死を知らん」という論語の言葉のとおりである。「いのちの電話」の相談員に求められるのは、当意即妙の答えを出す能力ではなく、答えのない問いに答えがないまま向き合う勇気と、分からないものに分からないまま付き合う忍耐である。今回の話がそういう習性を養う一助になればと思う。

2.　与謝野晶子の遺歌集『白桜集』に収められている晩年の秀歌がある。

　　ほのぼのと消え入りしもの帰り来ぬ命と云ふはこれにかあらん

人生は、生きるとはこういうことだと予め定義できるものではない。悲しみであれ喜びであれ、ある経験があって、ああ、これが生きるということだ、と驚きと共に気づく。そういう気づきを端的に表現するのが、短歌や俳句という「短詩の形式」であろう。その経験から生まれた、「命というのはこのことであろうか」、「これが生きるということか」という感嘆がおのずと歌となったのが、この一首である。

『みだれ髪』で華々しく登場した与謝野晶子は、「その子二十櫛に流れる黒髪のおごりの春の美くしきかな」と青春を誇らかに謳い上げた。彼女の内には「命」が激しく燃えていた。「いとせめてもゆるがままに燃えしめよかくぞ覚ゆる暮れて行く春」。しかし、こうした手放しの「無邪気な」自己肯定は、未だ人生を知らぬ「稚なさ」であったかもしれぬ。後年、与謝野晶子自身が『みだれ髪』

の時代を「嘘の時代」と言いきっている。そして、晩年になって「黒髪のおごりの春」とは対照的な歌を詠む。

山山が顔そむけたるここちすれ無惨に見ゆるおのれなるべし

この厳しい自己凝視から冒頭の歌が生まれる。すべてが燃えつきた、焦土のような「無惨に見ゆるおのれ」のなかに「消え入りしもの」がふと甦る。そのほのぼのとした一瞬に、「命と云ふはこれにかあらん」との感慨を禁じ得ない老歌人。こうして『みだれ髪』の二首と『白桜集』の二首を並べて見ると、与謝野晶子の中でいのちの質あるいは生きることの質の深まりゆくさまがありありと浮かび上がってくる。

人生を一首に凝縮する、そんな歌をもう一つ紹介する。

黄昏の身にうつうつと濃き思ひ己が無残を生き尽くさむと

作者柳澤桂子は生命科学者であるが、原因不明の痛みに苦しみ続ける。その耐えがたい痛みに全く動くこともできず、その痛みを少しでも和らげようともしない医療者の無関心に打ちのめされ、「地底を這うような苦しみ」のなかで悶え続けた。そんな自分の「うつうつ」とした人生を「無残」というひと言で表す。その否定的な人生の極限を、柳澤桂子は「己が無残を生き尽くさむ」と肯定に転じる。「生きていさえすれば、何かよいこともある。だから辛くても生きよう」というのではない。希望のない人生を希望のないままに生ききろうとする「濃き思ひ」に、これまた、「命と云ふはこれにかあらん」と思わざるを得ない。

3. 次は、私が直接に出会った二人の話。事例 YK。乳がんが発症して 22 年。もう再発しないだろうと思っていた矢先に再発して 6 年。全身の骨に転移している。痛みの緩和だけで治療はしていない。しかし、痛みは全く除去されず、焼け火箸を突き刺されるような痛みに襲われる。さらに、今後どんな痛みが待っているのかという不安で痛みが倍加する。死は覚悟しているが、障がいを抱えた息子を残して行くことを考えると、気持はゆれ動く。死に面して凛としていたいが、泣いたり、わめいたりするだろう。しかし、それもまたよし。弱さも私の特権。こんな言葉を残して彼女は他界した。

事例 NT。大学生の時に慢性骨髄性白血病を発症。骨髄移植によって一命を取りとめたが、ギラン・バレー症候群を併発。うつ病にも悩まされる。30 代で病状が安定したので、長崎ウエスレヤン大学に編入学。しかし、通学は体力を消耗させ、病状が悪化して再び退学。その後は一進一退しながら、体調の良い時には〈風の舎〉に来て、哲学や宗教の話をするのを楽しみにしていた。〈風の舎〉閉鎖後は月 1 回、長崎で会うことになった。48 歳になっていた。久し振りに再会して驚いたのは身体の衰えぶりと全体的な生気のなさであった。口を開くと、「自分の人生は失敗だった」と言う。大学を卒業することもできず、就職も、結婚もできず、昔の同級生が社会の中堅として活躍し、子供がもう中学生や高校生になっているのと較べると、自分は敗残者だ。健康が回復する見込みもなく、哲学の勉強をしたいという夢も、活字を読むことがきついという現状では、叶うこともない。自分の人生は何だったんだろう。こんなふうに訴える彼に、「じぶんがどのように生き延びて

きたのかについて語り合い、苦労の仕方を探究し合う」哲学（＝臨床哲学）もあるんだよ、と話し、「あなたの病気の経験を少しずつ書いてみたら」と奨めた。それ以来、半年以上になるが、毎回ルーズリーフ裏表で 2〜3 枚、これぐらいが精一杯ですと言うが、病状や病院生活の様々な断面が具体的に活写されている。それを読むのが楽しみなのだが、それ以上に、彼の表情がどんどん明るくなり、体調も良くなってきているのに驚く。そんな TN の笑顔に、私は「命と云ふはこれにかあらん」という思いを噛みしめている。

4. この二人の場合もそうであるが、人は死に面して、肯定的であれ否定的であれ、自分が「生きる」ことの意味に深く思いを致す。翻って、「いのちの電話」の「いのち」について考えると、それも「死の相の下」にあるいのちである。コーラーは、程度の差はあれ、「死の蔭の谷」を歩いている。生きることが辛く、虚しく、「私は生きていていいのだろうか」とか「死んでしまいたい」という思いにとらわれ、死の淵に転落しそうな危地に立っている。あるいは、死ぬことさえできないという絶望の中にいる。しかし、その窮境でこそいのちの光に触れるというのが驚くべき人生の真実である。そのとき、「ああ生きている」とか「生きていてよかった」とかいう転換が起こる。その転換を示唆するのが斎藤史の歌二首である。

老い呆けし母を叱りて涙落つ無明無限にわれも棲みゐて
死の側より照明せばことに輝きてひたくれなゐの生ならずやも

どこまで行っても光のない「無明無限」のなかで向こう側から来る光に照らされて、いのちが「ひたくれなゐ」に輝き出す。そして、人は実際に死に臨んで不思議な光を見る。歌人河野裕子は死の直前まで歌を詠み続けたが、その一つに次のような印象的な歌がある。

この世のものならずただ澄みてあかるき暗がりにひぐらしが鳴く

「あかるき暗がり」とは、不思議な言葉である。そう言えば、ひたくれなゐに輝き出すのは無明無限の闇なのかもしれぬ。いずれも形容矛盾であるが、死を前にした河野裕子にとっては、迫り来る死は一方では闇であるが、その闇は同時に澄みきった光を放つものであった。物心がついて以来、私の胸底には、「死に臨んで何を見るか」という問いが基調音のように流れ続けているのだが、この歌には、歌人が死に臨んで見た「この世のものならぬ」景色が見事に書き留められている。

これは俳人橋本多佳子が生の終わりに見たいと願った景色でもあった。彼女には

この雪嶺わが命終に顕ちてこよ

という鮮烈な句がある。彼女は、夜空を背景に白く輝く雪の嶺を見て、これこそが死に臨んで見たい景色だと思い、その雪の嶺が臨終の床に立ち顕れて自分を照らしてくれるようにと願っている。闇の中をさすらい汚濁にまみれて生きている身にとっては、死の床で見る澄みきった世界は一つの希望であり、そうであるとすれば「死もまたよし」と言えるかもしれない。宮沢賢治も死の床で「がぶがぶ湧いてくる」血を吐きながら、この希望を歌っている。

あなたの方からみたらずゐぶんさんたんたるけしきでせうが
わたしから見えるのは

やっぱりきれいな青ぞらと
すきとほった風ばかりです

5. 「いのちの電話」の対話は決して明るいものではない。終始、暗く沈んだ話である。しかし、そんな対話の中で、何らかの形で、光なき光とも言うべき「いのちの輝き」が見えなければ、それは「いのちの電話」ではない。与謝野晶子の歌で言えば、

光無きものもめでたし黄昏の青磁の色の群山を見よ

である。そんな光なき光としてのいのちを斎藤史は次のように詠む。

曼珠沙華葉を纏ふなく朽ちはてぬ咲くとはいのち曝しきること

曼珠沙華の真紅の花びらだけがいのちではない。それがしおれて朽ちはててゆく中にも歌人はいのちを見ている。明るい話ではなく、暗い話の中でも、あるいはその中でこそ、いのちは輝く。その意味で、とりわけ下二句がコーラーと相談員の対話を考えるとき、極めて味わい深い。「咲く」とは、裂くこと、発くこと、曝すこと、曝露すること、露呈することである。電話で自分の不安や困惑を訴えるコーラーは自分の弱さや脆さを相談員に「曝す」。それを聴いて相談員は平然としておられない。どう答えてよいかわからず、時にはうろたえる。それだけでなく、自分の人間としての矛盾や脆さがあばき出され、そういう自分に向き合わざるを得なくなる。その意味で,「いのちの電話」はたがいに弱く脆い「いのち」を曝し出して、そうすることによって「いのち」が触れ合う場である。この触れ合いの中で、コーラーが勇気を持って「無惨に見ゆるおのれ」に向き合い、「己が無残を生き尽くさむ」と思いたつならば、それがどんなにささやかな思いであっても、そこにほのかな光が射しそめる。

木靴はいて湖への段を降りゆけり夜露も水も底ひはあらぬ

これは斎藤史の初期の歌である。自分の内なる湖の底へと階段を降りて行く。「いのちの電話」は、そんな降段のプロセスである。コーラーは話しながら、相談員は聴きながら、そして互いに言葉を交わしながら、しばし沈黙の時を共有しながら、共に自分の湖の底へと、少しずつ降りて行く。そのさきで、雲間が晴れて、澄みきった空が少し見えるならば、それこそが相談員冥利に尽きることであろう。

12年間に及ぶ長い付き合いのMK。統合失調症と診断されているが、精神障がい者として付き合っているわけではない。たがいに生きることの根本矛盾に悩む者として週一度くらいの割合で時間を共有してきた。以前は自分の内面を話したり、それを詩にしたりしていたが、最近は話すより黙っている時間の方がはるかに長い。どんどん寡黙になっている。しかし、その沈黙の中で互いに自分の湖の底へ降り立とうとしている。そんな彼が今年の初めに、「こんなものを書いています」と言って見せてくれた歌がある。それを紹介して今日の話を終えることにする。

どん底のさらなる底を掘り進む行き着く先は天空の海